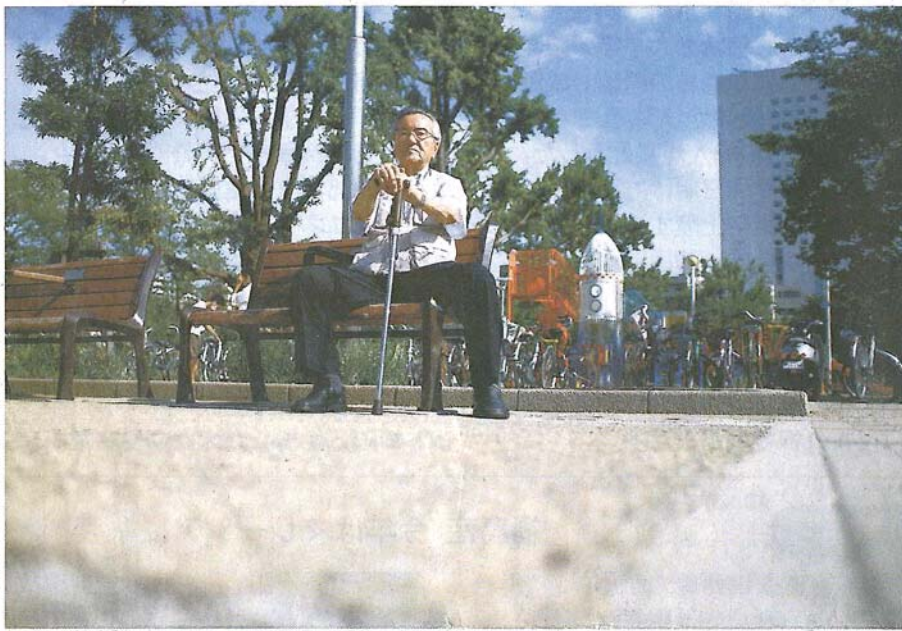




公園は埋葬地だった

—10万人が犠牲 東京大空襲

「夏の太陽がカッカと燃えている」。作家、高見順



忘れられない……。星野弘さんは言った。68年前の悲劇を思い起こさせる碑などはないが、記憶に焼き付いている。東京都墨田区の錦糸公園で、小出洋平撮影

が敗戦の日に、そう記したような強い日差しがまぶしかった。錦糸公園（東京都墨田区）は東京・下町、墨東と呼ばれるところにある。1928（昭和3）年の開園。東京ドームよりもはるかに広い。

子供たちが駆け回っていた。歓声が響き、母親たちが笑顔で見つめている。ベンチで談笑中のカップル。昼寝するサラリーマン風の男性。平和そのものの風景。星野弘さん（82）は東京都墨田区は四方を見渡しながら、68年前のあの日のことを思い出していた。

「ああ」と言いながら、一本の大木を指さした。「見覚えがありますね。大きな穴が掘られていましてね。そこに埋めたんですよ」

苦しい表情だった。当時14歳の星野さんはまさしく、ここにいた。同級生と一緒に、黒こげになった遺

体を引きずっていた。「あの臭いは……。忘れられませんか」

この公園にはかつて、1万2000体以上の遺体が埋葬されていた。だが、悲劇をしのぶすがは見当たらない。北の方にはスカイツリーが間近に見えた。

太平洋戦争中、米軍は都市を中心に無差別爆撃を繰り返した。45年3月10日、人口密集地帯が徹底して焼き払われた東京大空襲では、およそ10万人が殺りくされた。膨大な数の遺体はその後どうなったのか、ほとんど知られていない。

2度目のオリンピック開催地に選ばれた東京——。新しく華やかな歴史が紡がれる。一方で、忘れ去られようとしている戦争の痕跡がある。その歴史をさかのぼってゆきたい。

4面につづく